

賀茂縣主だより

菖蒲の根合の儀



毎年五月五日競馬会神事に先達って行なわれる神事で往古は宮中で平安時代殿上人・女房達が菖蒲の根の長さを競う行事であったのを賀茂社に移し賀茂社では乗尻によって菖蒲で頓宮(かりみや)及び棚尾社の屋根を葺く事に重点がおかれ、根合は頓宮前で菖蒲の取かわせを行う行事になっている。

暑中のご挨拶

理事長 西池 成 晃



発行所
〒603-8047
京都市北区
上賀茂本山339
賀茂別雷神社内
財団法人
賀茂縣主
同族会

賀茂社境内の木々の緑も深まり盛夏を感じる季候となつてまいりました。皆様には益々ご健勝でお過ごしのこととお慶び申し上げます。

本年前半の賀茂社へのご奉仕は、四月の曲水の宴に始まり五月の賀茂祭に至るそれぞれの神事に会員や子弟がご奉仕いたしました。何れの神事も晴天に恵まれ拝観者も多く非常に盛大さを感じるものでした。真にお目出たく喜ばしいかぎりです。

とくに賀茂祭は本来の格調の高さが甦ってきた感じがいたしました。これは大神の思召しであることはもとより田中宮司のご努力による賜物であり、感謝する次第です。

このほか本年前半の計画事業の一つ「賀茂季鷹翁の事蹟顕彰」については賀茂社一の鳥居近辺に木製の事蹟掲示板を建立することが理事会で決定され、また神社当局の許可も得られました。引き続き監督官庁等への許可申請作業に入っています。

次に本年後半の計画事業である重文系図の

曝涼・展観(七月三十一日)、祖先祭(十月三十日)は年初のスケジュールどおり実施いたします。また関係団体賀茂文化研究会のシンポジウムが祖先祭の前日(十月二十九日)に開催されますがこれにも同族会として参加してゆきます。

何れにも多数の皆様のご参加をお願いいたします。

また重文系図をデジタル複写し鮮明で保存性、複製性の優れた重文系図のバックアップを作る作業も進めています。

このほか現在の賀茂社では手不足により放置され荒廃している神山の磐座周辺の整理浄化作業を新しい容易な永久的ご奉仕として創設したいと考えます。この活動は「神山・社叢を守る有志グループ」(仮称)として春秋各一回磐座周囲の整理作業をし、そのあと磐座を拝礼しようというものです。

この活動は神社当局からの特別深いご理解と賛意を得、また京都府からも強い賛意が示されています。

言うまでもなく我々賀茂氏は古代以前からこの磐座に大神のご降臨を認識し祈りの対象の中心として代々心から祀ってきた我々の心の拠りどころなのであります。

我々の努力により磐座の清浄が保てるならば大神のみ霊を鎮めることができ、またご先祖も大いに喜ばれることと思えます。皆様のご参加をお願いします。

酷暑に向かいます折からご自愛を切に祈ります。



平成十七年五月五日

競馬会神事奉仕者

(敬称略)

第四列目

第三列目

第二列目

第一列目

右方乘尻(市 英顕)	催	方(堀内義晃)	黄衣	雑色
右方乘尻(中大路竜直)	催	方(市 聡顕)	黄衣	扶持補(藤木保久)
右方乘尻(馬場紘之信)	催	方(掘川経史)	催方(市 芳明)	扶持(芝 清晶)
右方乘尻(山本宗尚)	催	方(松田一雄)	右方肝煎(山本正信)	右方後見(岡本清仁)
右方乘尻(岡本清虎)	催	方(西池恒氏)	頓宮預(藤木文雄)	右方後見(西池隆造)
左方乘尻(山本浩矢)	催	方(山本雅浩)	左方後見(市 忠顕)	催奉行(戸田保輝)
左方乘尻(岡本氏和)	催	方(西池成晃)	左方後見(岡本正和)	右方念人(堀内保丸)
左方乘尻(市 法明)	催	方(藤木秀昭)	左方肝煎(山本浩久)	神主(田中宮司)
左方乘尻(堀内保大)	陰陽代(北大路元顕)	黄衣	催方(林 重明)	左方念人(藤木 茂)
		黄衣		所司代(梅辻 諄)
		黄衣		目代(山本武久)
				扶持(山本晃大)

第十二回「賀茂曲水宴」に童子奉仕

- ◎山本 晃大君 (山本 寛人氏長男) 平成十七年賀茂曲水
- ◎芝 清晶君 (芝 紀清氏長男) 宴が四月十日賀茂社「渉
- ◎藤木 孝顯君 (藤木 彰人氏長男) 溪園」で催され上記の四
- ◎山本 甲莞君 (山本 倫之氏長男) 君が奉仕してくれました。

葵歌壇

社頭の儀拝観
上賀茂 市 和 顕

賀茂祭緑の中に聞こえる

心は天に我身はここに

緋衣に小松の緑照り映えて

東游の笏拍子

岩 倉 藤 木 文 雄

噴きみづの彼方にさかる薔薇の群

幼き昔父と来し園

卯つ木咲く森の小径の水ぐるま

流れのゆくへ朱の宮見ゆ

冷泉家玉緒会所属
上賀茂 北大路 和 子

夏月涼

月影も風も川面をわたりゆく

むすぶ清水は袖に涼しき

火

浜風につたひて匂ふ蚊遣火の

おほろに見ゆる夏の夕くれ

紅葉浅深

つたもみしうすく濃く染む水の面を

たのしみてゆく保津の峽あひ

難波濁うす氷する有明に

いとも寒けに千鳥鳴くなり

初冬

もすの声ひときわ高き朝またき

冷たき風に秋を憶ゆる

競馬装束について

岩倉山 本宗 尚

今年の競馬会神事は事故もなく無事に終えることができた。本年は両埒に棧敷が設けられたことで、観客が乗り出したり傘やカメラのフラッシュなども以前に比べ少なかったように思う。また、一日は小雨で雨着だったため肝煎が袴であったことや、五日の装束の奴袴が萌葱色に新調されたこともあり、装束がより故実に近い形で奉納されたことが特徴であった。私が神事に奉仕してまだ年が浅いので、このようなことは知らなかったのであるが、「葵祭(賀茂祭)」（京都書院）に載っている十々十五年前の神事の写真が、私の知っていた最近の装束と上記の二点について異なっているのに興味を持ち、関係する史料を調べていたところ、今年その両方を実際の目当たりに行うことができたのである。本稿では史料の中で装束について書かれた部分について紹介したい。

●乗尻の装束
乗尻の装束に関する記述は鎌倉時代

代の史料(賀茂社嘉元年中行事には、競馬終了後に御殿の前で蘭陵王と納蘇利を舞ったという記述がある)をはじめとしていくつが存在するが、赤袍・黒袍という記述が多い。現在と同様の装束を記した例に「競馬記」(日本競馬記一九六六より。源城一九九三、一九九四翻刻のそれと同様のものと考えられるが、源城翻刻版には割注がない。)がある(点は著者による)。また、前号で紹介した「賀茂社競馬装束図」(馬の博物館所蔵)には同様の記述と共に寸法・図が示されている。点で示したとおり、萌葱と書かれていることがわかる。

左方

- 一、冠 細纒 一、老懸 一、衿襦 赤地輪
 - 一、接腰 赤地 一、缺掖 赤地輪
 - 一、指貫 又奴袴とも云、地萌葱色花
 - 輪違織紋黄、裏練龍紋萌葱色無紋、括紐綿糸
 - 操打、一、大帷子 布白 一、下帷子 地晒
 - 白無袖 一、下袴 前後二つあり 一、大刀 地晒布色蘇芳
 - 銀作減金、虎の生 一、鞭 左ねぢ 一、末廣 右ねぢ
 - 毛、帯柴革、露金
 - 糸鞋 亂緒
- 右方
- 一、衿襦 身背地織 一、接腰 ごふん金ら
 - 一、缺掖 黒袴好紅梅 一、下袴 ざんごんつ

一、大刀 金作減金、尻豹毛生
其餘左方に同じ

●肝煎の装束

肝煎については装束に関する記述があまりみられない。「五月朔日足汰乗尻覚悟記」(京都府立総合資料館所蔵)中の二頭駆けの部分に、「于時出口肝煎四人各統上下、左右へ兩人充相分レ」とあり、寛永頃には袴であったようである。また、「諸神事注秘抄」(上賀茂神社所蔵)にも同様の記述がある。

●追記

賀茂競馬に関する説明(英語版もあり)を私のホームページ(<http://rchyarc.nagoya-u.ac.jp/~yamamoto/>)に載せているので、興味のある方はご覧頂きご意見やご感想をお聞かせいただければ幸いです。

●参考文献

- 日本競馬史編纂委員会、一九六六：日本競馬史 巻一、日本中央競馬会、五八〇p p。
- 源城政好、一九九三：賀茂競馬会神事関係資料(二)競馬記(一)、賀茂文化研究、二、八一―九六。
- 源城政好、一九九四：賀茂競馬会

神事関係資料(三)競馬記(二)、賀茂文化研究、三、一〇五―一二〇。

葵俳壇

上賀茂 藤 木 十紫子
緑さす明神川に鴨一羽
冠に茶髪覗かせ競べ馬
かぶり火の祝詞に揺れて夏祓い

上賀茂 北大路 みよ子
挿頭葵なびく馬上や賀茂祭
橋殿に東遊びや賀茂祭

山駆に神山の風薫りけり
祭明け賀茂しつとりと走り梅雨
日の落ちて妖しいろなすかきつばた
御神燈灯して終へる賀茂祭り

歴史勉強会だより

リーダー 梅 辻 諄

三月より五月まで、競馬などの行事のため休会していましたが、六月より毎月一回の勉強会を続けます。上賀茂はまだ明らかにされていない歴史の宝庫で、毎回新しい話題が提供されます。この際、ともに勉強してみようと思われる方は是非御参加下さい。参加

御希望の方は梅辻まで御連絡下さい。その次の回より御案内を差上げます。

(一)五年後に在実卿千年祭がせまつて来ました。祭典のみならず数々の記念行事が催されると思いますが、その一環として、是非われわれ同族会の最も貴重な書物『賀茂注進雜記』の釈注ならびに現代語訳を完成して、若い人々にも親しんで頂ける本を出版したいと考えています。単に文章だけでなく、写真やイラストも入れた楽しい本に作りたいと念願しています。この本についてアイディアがありましたら、是非お寄せ下さい。

(二)今年も『みたらしのうたかた』第五号を十月三十日の祖先祭の当日に発刊したいと思えます。四号までの内容でおわかりのように、堅い論説ばかりではなく、日頃ちよつと思いついた事、古い文章の翻刻やら古文書の解題などさまざまな内容を含んでいます。どうぞ遠慮されることなく、奮って御投稿下さるようお願いいたします。

手書き原稿の場合は遅くとも九月二十日までに、梅辻宛お送り下さい。パソコンやワープロによる印字原稿は九月末日までにお送り下さい。印字された原稿はそのまま印刷しますので、既刊の『みたらしのうたかた』を御参照の上、お書き下さい。また写真は

白黒で印刷しますので御了承下さい。

同族の皆様のお宅にはまだ膨大な量の古文書が眠っているものと想像します。故藤木正直翁の話では、明治四年の国家による神社接収の際に、重要と思われる文書を同族の各家で分担して預かり保存したとの事ですが、もしこれらが各家に現存するならば、そのまま世に出ることなく埋れ朽ち果てるのはまことに勿体ないと考えます。従って、そのような御所蔵の文書の解題とまで行かなくても、リストや写真などを『みたらしのうたかた』に投稿して頂けるならば、史料蓄積としての同誌の役割は一層大きくなることでしょう。

古文書は管理不十分ならば必ず朽ち果てます。また、ナフタリンなどの殺虫剤は効果が乏しいこと、さらに燻蒸はむしろ有害なので今後は廃止されるのが昨年の文化財保存学会(於京都造形芸術大学)で報告され、古文書の所蔵者は真剣にその対策を構じなければならぬことになりました。われわれも今後この点について情報を集め、皆様の古文書保存に助言できるようにしたいと思います。

(三)十月二十九日(祖先祭の前日)午後一時半より上賀茂小学校講堂において、シンポジウム「上賀茂の文化を

語る」(第三回 賀茂の自然)、主催シンポジウム実行委員会(賀茂文化研究会、賀茂県主同族会、京都産大他)を開催します。主な講演予定は、寺脇研氏(文化庁文化部長)「地域の文化「資産」を生かす」、野村哲郎氏(京都産大教授)の「上賀茂におけるテントウムシの斑紋と温暖化」、および、斉藤萬之助氏(京都産大教授)の「土の働きと上賀茂周辺」の土の三つです。最近の急激な都市化により、上賀茂の住民の半数以上が新しく来られた方となり、われわれをとりまく自然環境も住環境も大きく変わろうとしています。祖先祭の前日なので遠方の方は早目に御来洛あつて御来聴下さい。

(四)十一月十三日(日)十時より、既に恒例となつた梅辻家住宅(京都市指定文化財)を一日公開します。主催は賀茂文化研究会、協賛は賀茂県主同族会です。また、生花展示は山村御流の皆様です。入場料は無料ですが、その際大田の沢保存会への寄附を頂ければ幸甚です。また、同じ日に別のお宅に公開の御予定がある場合には「社家公開日」と名を改めたいと思います。

かつて痛みの烈しかった梅辻宅も過去三回の屋根その他の修理を京都市と京都府からの補助金により了えることができました。考えて見ますと、

将来このような文化財を個人の力で保つのは非常な困難が予想されます。これは旧社家にお住まいの方々の共通の問題と考えられますので、その対策を共に考える場が、わが同族会の中に設けられることを念願しています。

平成17年度下半期会議日程(於 神社)

- (1) 評議委員会
第38回 平成17年10月9日(日) 13:30
- (2) 理事会
第41回 平成17年10月16日(日) 13:30
- (3) 合同事務局会議
第52回 平成17年7月17日(日) 13:30
第53回 平成17年9月11日(日) 13:30
第54回 平成17年11月13日(日) 13:30
第55回 平成17年12月11日(日) 13:30
- (4) 系図展観
7月31日(日) (雨天中止)
- (5) 祖先祭
10月30日(日)

編集後記

同族会の諸行事も年毎に増して行く感があります。私共共通の先人達の偉業を守り今後に伝承する事が私共会員一人の務めではないでしょうか。

同族会全般について判りにくいところがありましたら理事又は評議員迄お尋ね下さい(十六年度会員名簿ので役員名簿参照)。